

思春期肥満は50歳までの心血管病と癌死の増加を招き平均寿命が短縮する

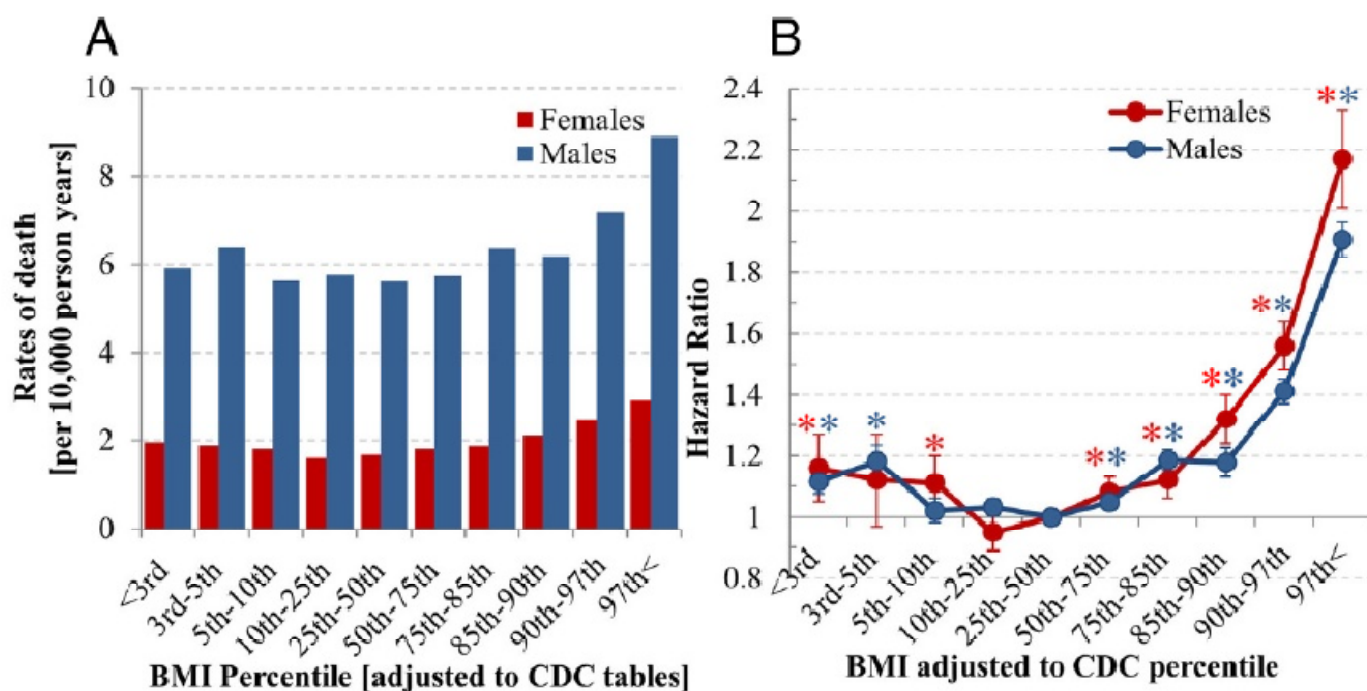
20-50歳での病死は家族の中心である場合が多く社会での損失が多くなります

今回は早期介入による肥満防止を取り上げました。今回は16歳から20歳時の体格指数(身長を体重×体重で割ったもの)と50歳までの死亡率を調べたイスラエルからの報告を取り上げます。

平均寿命の伸びは、新生児・小児期の死亡によるものが主体でしたが、最近では70歳以降の死亡率減少によるものが増えてきています。50歳以下の成人死亡率は低いのですが死亡原因は男女で異なり、女性では悪性腫瘍によるものが多く事故が続きます、男性では事故が多く次は心血管系となります。死亡率は低いものの働き盛り家族の中心となる年齢なのでこの時期の死亡は社会的影響が大きいものです(ヒトパピローマウイルスワクチン俗称子宮頸ガンワクチンは、子宮頸ガンになり亡くなるかたが40歳前後の年齢の方で予防は重要です)。肥満は、悪性腫瘍・心血管系の死亡と関係する事は明らかですが、50歳以下でどの程度影響があるかは不明でした。

イスラエルでは男女全員兵役義務がありその1年前に身体検査が行われます。イスラエルからの報告は、1950-1993年生まれの16-20歳ユダヤ系住民全員、軍役1年前に身長・体重・血圧・病歴等を調べ、その後50歳まで、死亡するまで、最終2011年6月のどちらか最初にくるまで見たものです。最初の対象者は232万人、自病・軍関係で事故死等を除くと最終解析は216万人となります。

1950-1960年と1970-80年生まれの標準体重者で比較すると50歳までの死亡率が1万に当たり5人から3.6人に低下しました。しかし肥満者では死亡率の低下は見られませんでした。肥満度上位3%では男性死亡率は1万にあたり8.9人と約2倍に増加し、女性では1.5倍でした。



図A 思春期年齢検診時の体格指数(BMI)と50歳までの死亡。肥満が増加すると男女とも死亡率が増加する。

図B 男女別心血管系が原因で死亡する率。BMI標準を基準とするとBMIが増加するとBMIが上位3%では心血管系死亡が2倍以上に増加する。

結論としては思春期肥満により若年死が増加し肥満が増加する事により平均寿命の延長がなくなる可能性があります。前回の早期介入による肥満防止が重要です(当院での健診の重要課題です)。

文献Twig G et al: Adolescence BMI and Trends in adulthood Mortality:A Study of 2.16 Million Adolescents JCEM ISSN Online 1945-7197, 2014(online before printing)